

松山幸雄著「鳩山から鳩山へ - 歴史に学び、未来を診る」朝日新聞出版 2009年12月刊を読む

### エリートの鍛え方を変えよ - 日米の大学の差

1. 大衆民主主義の時代、「エリート」という言葉を使うのは、あまり好ましいことではない(実際学歴や家柄を自慢するエリートは鼻持ちならない)が、しかし実際問題として、国際社会で国益を左右する、あるいは国のイメージを決めるに当たって、エリートの占める役割はたいへん大きい。ちょうど高校野球で、いかに応援団が力もうが、同窓会が寄付を集めようが、勝負を決めるのは、レギュラーの選手、とくにエースや、強打者の存在である、というのとよく似ている。そしてエリートの国際競争力の有無、強弱は、結局それぞれの国の高等教育の問題に帰着する——というのが、長い国際経験に基づく私の結論である。
2. ハワイ大学に一週間滞在してびっくりした。朝七時半図書館が開くと同時に、学生が続々入り込んで勉強を始める。食堂でも、教科書や参考書に目を通しながら食事を摂る学生が少なからずいる。ハーバード大学で一年過ごしたときも、学生たちの猛烈な勉強ぶりには心底感銘をうけた。日本語の授業にゲストとしてよばれて行ったら、始まる前、みんな廊下やロビーで真剣に最後の予習をしていて、おしゃべりする者皆無。だから「天声人語」が2、3年で読めるようにもなるのだ。私が日本の大学生相手にしゃべるのとほぼ同じ程度の日本語で「日米文化比較論」を講義すると、ほぼ完全に理解する。ジョークへの反応など、日本より優れているくらいだ。

P211 ~ 213

### [コメント]

朝日新聞のコラムニストとして私が特に好きなのは、故・深代惇郎氏とこの本の著者 松山幸雄氏のお二人だ。社会のリーダーたらんとする人々に対する期待が込められたこの「エリートの鍛え方を変えよ」は、大学で教えるすべての人々と、大学で学ぶすべての人々が胸に手を当てて読むべき文章だ。

- 2009年12月1日 林明夫記 -